

2 どのように里山を再生するか？

(1) 取組の進め方

現代を生きる私たちが無理なく出来る里山再生の取組とは、私たちの生活スタイルにあったものであるべきと考えます。例えば、地元産のキノコを食材に使うことも里山再生の一環です。本計画では、さらに一步踏み出し、より安全で豊かな暮らしにつながるような取組を協働で進めます。

なお、本計画は、今後、継続して進める取組のうち、はじめの5年間（平成27～31年度）を計画期間とします。この計画期間で里山再生に向けた一步目を踏み出しつつ、将来的な取組の基礎固めをしていきます。

(2) 計画が描く里山の未来像

市内の里山である西山と東山とでは、その地域特性が異なるため、目指す姿も当然違いますが、この計画では、里山の未来像を地域ごとに限定するのではなく、本市全体の大きな方針として考えます。

この計画が描く里山の未来像とは、多様な林齢・樹種からなる森林や草草がバランスよく配置された明るい里山です。そこでは、多くの人々（市民、事業者、行政）が活動し、里山の資源を活発に利用しています。

そうした里山は、市民にとって訪れやすく親しみのもてる環境となり、動物、昆虫その他の生物が、互いにバランスをとりあった生物多様性に富んだ豊かな自然環境が形成されます。また、多くの市民の目が里山の森林に向けられ、木材利用が進展することは、過密・高齢化による森林の脆弱化を防ぎ、森林の土砂災害防止機能や水源涵養機能の維持向上にも役立ちます。

そして里山は、災害の少ない安全な暮らしを実現し、きれいな水の確保につながり、森林資源の提供、レクリエーションの場、そして人が大自然の営みを知る貴重な場となって、私たちの暮らしを豊かにしてくれると期待されます。

ただ、こうした里山像は、一朝一夕につくり上げられるわけではありません。未来の里山への第一歩は、少しずつでも里山の資源を利用する気運を高める仕組みを創り、市民の関心が里山に向かうことです。

●●●● 里山の未来像 ●●●●

1. 多種多様な環境から成り立つ里山

多種多様な林齢・樹種からなる森林や草地在り山がバランスよく配置された明るい里山を作ります。

2. 多くの人々が里山を資源として利用

里山が、市民にとって親しみの持てる場となり、レクリエーションの場、森林資源を得る場、大自然の営みを知る場として機能します。

3. 災害の少ない安全な暮らしをもたらす里山

木材利用の進展による森林の土砂災害防止機能や水源涵養機能の維持向上が、災害の少ない安全な暮らしを私たちにもたらしめます。

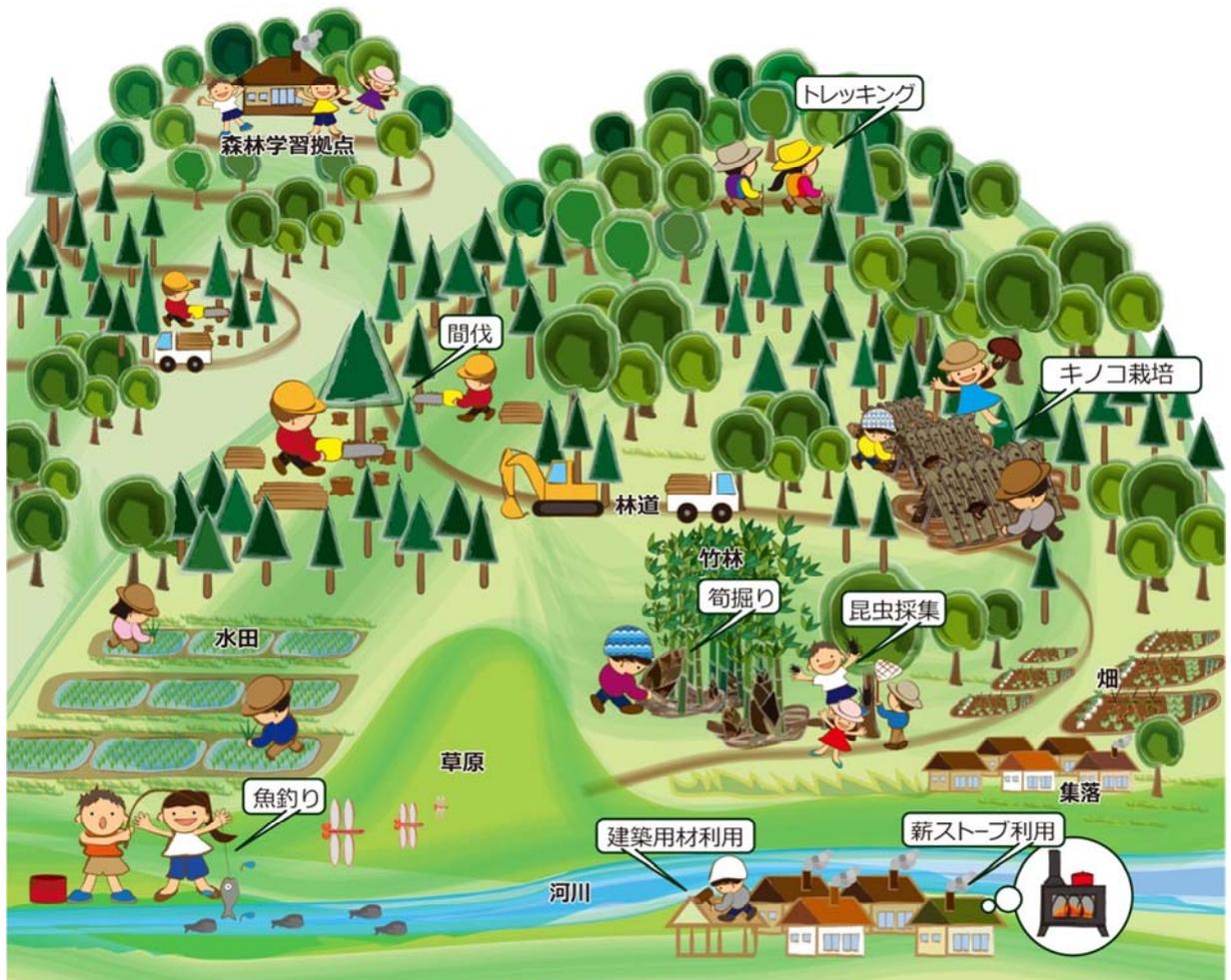


図 2.1 里山の未来像

(3) 取組の方針

市内の里山が抱える課題は、私たちが里山の木を伐って利用することが少なくなり、里山に入らなくなったことで引き起こされていると述べてきました。

これらの課題は、裏返して考えてみれば、私たちが里山の木を伐って資源として利用したり、里山で活動することで解決に近づくこととなります。

そこで本計画では、里山の木を伐って資源として利用し、山づくりを進めることにつながる取組として、以下の3つを掲げます。なお、国や県の補助事業により実施している森林整備、木材利用促進、松枯れ対策については、本計画の検討内容から除外しています。

① 里山資源の利用

市内には、伐採適齢期を迎えた樹木が生育しています。また、かつて薪炭として活用されたコナラなどの二次林も十分に生育した状態にあります。

カラマツなどの針葉樹は、すでに森林整備計画などのもと、一部で伐採が進められています。こうして伐り出された木材は、現在は市外へと流通していきます。また、二次林については、市内の薪加工生産事業者により薪が生産・供給されていますが、市内で消費される薪の多くは、市外から流通してきています。

そこでこの取組では、市内で伐った里山の木材は、市内で活用することを目指して、建築用材は市内の住宅などで活用する需給を生み出し、また、コナラなどの二次林から得られる材は、燃料などの木質バイオマスとして市内で活用する需給システムを生み出します。そのために、建築用材及び木質バイオマスとしての活用を模索する取組を、市民、事業者、行政が協働で立ち上げ、里山で市民、事業者、行政と一緒に活動する場を作ることに取り組みます。

② 里山での活動推進

市内には、すでに里山再生につながる取組を活発に進める市民団体があります。こうした市民団体の活動によって、一部の里山には豊かな自然が戻り、人々が楽しめる空間が生まれつつあります。

こうした活動の輪が、市全域に広がるのが理想ですが、どのような活動ができるのか、よく知らない市民、事業者も少なくありません。

そこでこの取組では、一人でも多くの市民、事業者、そして行政が、里山での活動方法を学び合う場をつくり、それぞれの手法で里山に入り、活動の輪を拡げます。そのために、里山ですでに活動している市民団体や専門家を講師とする、「あづみの里山学校」（以下「里山学校」といいます。）を立ち上げ、誰もが気軽に里山再生に参加できるようにします。

③ 松枯れ・鳥獣被害の減少

松枯れ、鳥獣被害は、「これさえあれば全てが解決」というような手法はまだありません。様々な対策を組み合わせ、継続的に取り組むことが重要です。

全国的に松枯れや鳥獣被害が深刻化するなかでは、様々な対策の組み合わせや、継続的な取組がままならない事例も多くみられます。その要因として、こうした被害への対策が、暮らしの中で日常生活の一部として営まれる行為ではなく、対策のためだけに取り組まなければならない特別な行為であることも一つの要因です。

そこでこの取組では、ちょっとした工夫で、暮らしの中で楽しみながら取り組めることを松枯れ対策や鳥獣被害対策に替えていきます。そのため、枯れた松を燃料や自然を楽しむツールとして活用したり、山際で楽しむ活動を通して野生鳥獣が集落に侵入しにくい環境を作り出します。また、今後松枯れが拡大する恐れがある地域においては、積極的にアカマツの利用を進めるなど、被害を未然に防ぐ取組を進め、被害の拡大を抑制します。